

# 文化財だより

第18号

## も く じ

鳥屋神社奉納絵馬 “奥州石ノ巻図”が県指定に!! .....	1
誌上文化財めぐり .....	2
建築物緊急調査(1) .....	6
建築物緊急調査(2) .....	11
上品山寺跡の板碑について .....	18
旧町名表示石柱設置事業 .....	23
“あれ?こんなところに文化財が” .....	24

## 鳥屋神社奉納絵馬

## 〃奥州石ノ巻図〃が県指定に!!

昭和63年11月29日、石巻市羽黒町一丁目、鳥屋神社(宮司・櫻谷隆氏)に奉納されている絵馬「奥州石ノ巻図」が、宮城県指定有形文化財に指定されました。

石巻市内では、社団法人神楽(昭和46年指定)、田代島の仁斗田貝塚(昭和50年指定)に次いで、三番目の県指定文化財です。

石巻は、川村孫兵衛の北上川大改修以来、仙台藩の江戸廻米制の基地として発展を続け、また南部、一関各藩の北上川

▲鳥屋神社拜殿



舟運の基地として、同時に東北地方への江戸文化流入の玄関口として非常に賑いを見せました。

この絵馬は、その賑いの様子を、黒漆地に金、銀、朱を使い、蒔絵風に描き出したもので、「港町石巻」の肖像画としてばかりでなく、舟運関係資料として、また美術工芸品としても県内に数少ない優品の一つであるといえます。

縦八十六・三、横百三十五・五の画面の中央に北上川と中瀬が描き出され、河口から入港し、または停泊し、荷役する二十数隻の千石船、湊や門脇の両岸に立ち並ぶ米蔵群に町家の屋並が細かく描き出され、「数百の廻船入り江につどひ、人家地をあらそひてかまどの煙立ちつづけたり・・・」と松尾芭蕉の記した情景そのものです。この絵馬は、石巻中町の総若者中によって文化二年(一八〇五)八月十三日に奉納されたもので、作者は会津若松生れの蒔絵師・長谷三吉衛門義一であることが、絵馬の裏書によって知られています。しかし、残念ながらこの作者の詳細は知られていません。

昭和50年に東北歴史資料館より、この絵画手法、工芸技術の価値が認められ、展示及び複製が作られ、昭和53年には石巻市指定文化財として指定されました。



▲県指定文化財「奥州石ノ巻図」

「誌上文化財めぐり」

## 歩いてみませんか： ふるさとへの文化財

石巻には、いろいろな文化財があります。町のちよつとしたところにも「へまゝ」、こんなところに！、「こんなものが！」、みなさんの知らない「文化財」があるのです。今日は、駅から始まる誌上文化財めぐりです。みなさんは、いくつ知っているでしょう。

まずは、石巻の顔ともいえる「石巻駅」  
▲仙石線石巻駅



からスタートです。

### ①宮城電鉄跡（JR仙石線石巻駅）

山口県出身の実業家山本豊次はか9名が、大正12年（一九二二）12月設立した宮城電鉄の敷設、経営による仙台―石巻間の電気鉄道（電車線）は、昭和3年（一九二八）11月の全線開通以来「宮城電鉄」の名で親しまれ、沿線各市町村の政治経済・教育文化の進展に關して多大な恩恵をもたらしました。太平洋戦争中の昭和19年、沿線の多賀城に軍需工場が、また矢本に飛行場が建設されたことにより、軍当局の要請によって全線が国鉄に買収され、「仙石線」と改称、その後昭和62年4月に民营化され、現在に至っています。

### ②仙北軽便鉄道跡（JR石巻線石巻駅）

明治44年（一九一〇）、仙吉の貴族院議員荒井泰治氏と、小牛田―石巻間の各町村の努力で、仙北軽便鉄道の工事が開始され、大正元年（一九一〇）に完成しました。この完成により、石巻発展の再スタートを見ることになりました。

大正8年（一九一九）国有鉄道となり、昭和14年（一九三九）女川までの延長工事が完成しました。その後、昭



▲石巻線石巻駅舎

和62年に民营化されたのは、皆さんもご存知のとおりです。

駅前通りを立町通りへと左折し、まじまじ

四月の「石巻町裏通中井面橋町続の場所屋敷二被成下、右路立町と相唱候様御下知之事」という下知状によって誕生した事が知られています。この立町通りを抜けて、生まれ変わったアイディア通りを行くと、左手に陶器店が見えてきました。ここが丸寿美術館です。

### ④丸寿美術館（鶴巻屋九本店三階）

江戸時代、石巻を出帆した千石船は、



▲丸福寺本堂

江戸で米をおろすと、軽くなった船体を安定させる為、船底に生活雑貨や江戸文化を代表する作品を積んで、石巻への帰路につきます。その千石船の中には「親慶丸」があり、初代船主は、天保の頃から江戸廻米にたずさるるかわら、茶わん、皿、花瓶などを持ち帰り、石巻最初の陶器店を開業したといわれています。その頃から、家業の参考作品として持ち帰った古伊万里、古九谷などの名品の数々は、船名をそのまま店名にしたこの店の三階に、丸寿美術館として散逸することなく保存されています。

アイトピアと広小路との交差点を羽黒山方面に右折してみよう。つきあたりに、立派なお寺が建っています。

#### ⑤海石山壽福寺

葛西家代々の祈願寺として天台宗大善院と号したお寺で、本町にありました。葛西家没落の後、賣えたこの寺を真言宗に改め住吉神社境内に移転し、海石山壽福寺と称しましたが、正保二年（一六四五）仙台藩に於て殺害を建設することとなり、再び在地に移転されました。

本堂には多数の絵馬があり、その数絵柄の豊富さは他を圧倒しています。また本堂北側の墓地には、鑄銭場で働いた人々の墓や供養碑があります。

寿福寺を出て、細い路地を右手に行くと、またお寺が建っています。

#### ⑥菩提山水蔵寺

寛永十一年（一六三五）、松本但馬兼満は、信州松本から落ちのびてきた先祖の遺骨を八ッ沢（現石巻小学校背後）松本山に改葬し、菩提庵を建立しました。その後寛永十九年（一六四四）に仙台輪王寺の角外恕禪和尚を講じて開山し、四代の時に現在地に堂宇を建立して菩提山水蔵寺と改称したのです。境内には天保飢饉供養碑があります。また、不動堂の境内に、大正時代の未鑑動の果結場所でした。

山門を出ると目の前に大きな石碑が建



▶永観寺本堂

ついています。これが⑦金華山道標です。

江戸時代から明治時代にかけて流行した金華山参りの街道に、このような石製の道標が建てられ、今でも市内数ヶ所に残っています。すぐ近くの⑧八ッ沢緑地公園は、明治22年（一八八九）4月、石巻町誕生の時の官庁街で、役場・議事堂・図書館などが建っており、昭和9年の庁舎移転後は公民館が建てられました。また水蔵寺山門脇の映画館周辺は仙台藩士栗野至右衛門の屋敷跡といわれています。

#### ⑨吉田松陰宿跡（立町一丁目）

東北地方の海岸防備状況や民情視察のため、嘉永四年（一八五二）十二月十四日に江戸を出発した松陰は、翌五

年五月十六日に石巻に到着しました。松陰は、途中で別れて石巻に滞在中の親友飯沼通高を訪ねました。通高は松陰と福島付近に出迎えに行き、すれ違いとなってしまいました。松陰は、通高の縁高先石巻村裏町（現立町一丁目）の仙台藩士栗野至右衛門邸に一泊したのでです。

水蔵寺の参道を下って、市役所通りを横切って裏通りへ歩いてみましょう。ここが通称御殿横丁です。

#### ⑩御殿横丁

この周辺は、伊勢国出身の豪商源左衛門が建設し、宝永・享保半間に仙台藩に威納した、「御座之間」、「御奉行之間」など、23室に及ぶ広壮華麗な御仮屋がありました。歴代藩主の、輿持こころです。江戸時代の絵図には、「御殿」と注記され、住民からも御殿と呼ばれていました。

この御殿横丁を広小路へ抜け、細い小路を入ってゆくと、「千登里」の看板が目に入ります。

#### ⑪「繪園」のおもかげ

自然主義文学の最高峰といわれた、徳田秋声（一八七二—一九四三）の最後の作品「繪園」は、石巻を舞台としています。この「千登里」は作品中に登場するところで、建物は当時のまま残されています。

小路を抜けて、真直ぐに住友公園へと歩きましょう。車には十分気を付けて下さい。北上川を渡る風が頬を気持ちよく撫でていきます。公園でちょっとひと休み……ベンチに腰かけながら周囲を見まわすとすぐ目の前に神社が見えます。

#### ⑫大島神社

石巻地方十箇所の延喜式内社は、俗に「杜野十座」と呼ばれ、歴史のある由緒ある神社として、古くから信仰を集めました。大島神社もその一つで、江戸時代の古文書にも、この神社の事が記されています。



▶大島神社拝殿



▶巻石

## ⑬ 袖の渡り

北上川の開きく以前は、真野川や道川が流れこみ、ここ大島神社前は渡し場であったと言われています。古くから歌枕として知られ、松尾芭蕉の「おくのはそ道」にも登場します。源義経が平泉に下る途中、舟賃の代わりにも袖をちぎって船頭に与えたとする伝説が残されています。

## ⑭ 石

住吉公園の前に小島があり、その北端の川の中にある石で、これが「石巻」の地名になったと伝えられています。石巻の地名由来については諸説ありますが、江戸時代の「石巻村風土記御



▶旧毛利邸

用書出」等、各種の古文書に取り上げられており、江戸時代にはこの「巻石」が起源であるという説が一般化したものと思われています。

さあ、疲れはとれましたか？あと少しです。頑張っ歩いてみましょう。住吉公園を出て北へ真直ぐ進んで行きます。左側に、説明板のある家が見えてきます。

## ⑮ 志賀直哉生家跡

武者小路実篤等と共に、「雑誌「白樺」を創刊し、「暗夜行路」の作者として知られる志賀直哉は、明治十六年（一八八三）二月二〇日、ここに生まれま

したが、彼の石巻での生活は二歳までで、その後上京してしまいました。近くの広濟寺には、早世した彼の兄直行の墓があります。

もう少し歩いて行くと、住吉小学校の手前に、古風な一階建ての建物が見えてきます。

## ⑯ 旧毛利邸

この建物は、幕末の名残りを現在に伝える貴重な建物です。

明治元年（一八六七）十月、石巻は突本まで迫って来た官軍と、榎本武揚、土方歳三等を中心とする旧幕府軍との衝突の危機を迎えていました。この時、旧幕府軍に多量の物資を調達し、この地を撤退させて石巻を救ったのが細谷直英と毛利理兵衛でした。

毛利氏は、仙台藩米蔵を管理する、「御石改帳目」の家柄で、この建物は二階が平書院造で、各所に凝った造りが見られ、当時の有力者にふさわしい風格を備えています。

また、二階には土方歳三が口論の際切りつけた刀痕であると言われている柱の傷が残っています。

すぐ隣の小学校の周辺は仙台藩米蔵跡で、正保二年（一六四五）に江戸廻米用倉庫が建設され、宝曆三年（一七五三）に倉庫が十八棟にも及んだ事が記録に残っています。

そろそろ駅の方に戻りましょう。もう一度住吉公園まで引き返し、今度は千石

町へと足を運んでみます。右手に大きなホテルが見えてきました。この周辺は「旧町名「新田町」という所です。元禄二年（一六八九）五月、「おくのはそ道」の途中石巻を訪れた松尾芭蕉は、新田町の「四兵衛」宅に一泊しましたが、その場所が具体的には判りませんが、おおかたこの周辺であろうと考えられています。更に真直ぐ進んで行くと、仙台藩錫錢場跡に出ます。

## ⑰ 仙台藩錫錢産跡

享保十一年（一七二六）、仙台藩は、幕府から領内産出銅のみによる貨幣の鑄造を許可されました。翌々十三年に採業を開始し、幾度かの中断をはさんで明治元年（一八六八）の廃止まで、百四十年間断続的に行われました。

これにより藩財政は潤い、石巻は非常な活況を呈したと言われています。また、現在ある稲荷神社は錫錢場内の入口付近にあったものと思われています。

このまま駅前へと歩いて行くと、いよいよ今日の「誌士文化財めぐり」も終りに近づきました。都合90分程度の行程ですがいかがでしたでしょうか。市内には、まだまだ隠れた文化財が沢山あります。今後、何らかの形で紹介していきたいと考えております。

本日はお疲れさまでした・・・

（案内役 石巻市教育委員会）



# 建築物緊急調査 (1)

## 1 調査に至る経過

昭和62年11月、伊原津の法山寺より、山門の改修にあたりその文化財的価値を調査したい旨の連絡があった。市教委では、さっそく調査者の選定にあたり、東北大学教授坂田 泉氏に協力を求めて調査することになった。

以下はその報告であり、法山寺及び法山寺總代の方々の特別の取り計らいにより掲載するものである。

## 2 調査実施要項

調査対象 石巻市湊字虎妻山96  
法山寺山門及び本堂内陣

調査期間 昭和62年12月17日、18日

調査主体者 宗教法人 伊原津法山寺

調査担当者 東北大学教授 坂田 泉

調査参加者 東北大学文化庁官  
東北大学 田中 正三  
東北大学 大学院生  
佐藤 千秋  
米倉 正博  
渡辺 裕生  
東北大学学生 田村 丈二  
社会教育課文化係

## 3 調査の概要

法山寺は、その経歴、創立年不明であるが、沼津にあった天台宗妙法寺を当地に移築したのと言い伝えられている。本調査は、山門改修に伴ってその文化

財的価値を明らかにすることを目的に行われ、同時に本堂のうち内陣部分が古式を残していることが判明した為、緊急に調査を行ったものである。

## 4 調査の結果

### ●山門

正面三間 側面二間 薬医門

切妻造 スレート葺

桁行五・九七六寸 梁間三・一三三寸

棟木高五・五一八寸

全て角柱で扉は無い。両脇間は板壁で花頭窓に格子戸付き欄を設置。柱に残る栴穴などから、もと全面板壁と推定される。

正面角柱上の冠木桁に二手先組物をのせ梁を支える。正面中の間の中備は肩に渦巻付の板幕股、両脇の間のそれは竇東である。組物には尾棟、支輪を備え、本尊は華藻、梁の正面先端は丸桁でかく組物で丸桁を支持するために複雑化し、形式の上で地方色をよくあらわしている。小屋根は、男梁を含めた合計6本の太い梁で支持され、全体として軒の繁様で、身倉部分の化粧屋根裏が吹寄せ様になっているのは、屋根裏の見栄えを考えたことであろう。

切妻破風の押懸魚は、錆付きの鰻鰻魚である。

造営の時期であるが、形式から江戸中



▶法山寺山門

期と推定される。山門の西南の石柱に明和七年(一七七〇)の「不許草酒入山門」及び他所から移されているが、明和二年(一七六五)の石仏のあることから、その頃ではないかとも考えられる。

この山門は、雨による屋根部分の腐食のはげしさから修復が加えられた。柱元をコンクリート基礎にのせ、その柱脚は鋼板を巻いて保護し、屋根は茅葺からスレート葺に改造されている。

●本堂内陣まわり建築装飾

本堂は改築が繰り返され、その歴史は資料が皆無に近いため考察は不可能である。しかし、内陣まわりは古材を適宜に転用している。特に本堂内陣の後方、二本の来迎柱筋の上部が著しい。これは、



▶法山寺山門調査状況

古式を示している。紅梁、頭貫、台輪、組物、両脇の幕股と天人の絵に見られる。

天人の絵は、極彩色で横長の枠組に豎羽目の板に描かれ、それは飛天であるが顔は横向きの、右は顔を吹き左は散華の状態、絵はかなり退色している。そして、来迎柱上の組物の後補の肘木が、両

飛天の頭部分をかかしているの、ここを修復する前に嵌め込まれていたことがわかる。その下部の幕股は十分に力強さがあって、古式を思わせるが、太目の

両脚、斗上の大きめの実肘木、その脚内の果物の大きさなどから江戸初期から前期の作と推定した。その他このあたりの組物も古態を保ち、或は同時期かとも考えられる。



▲山門組物



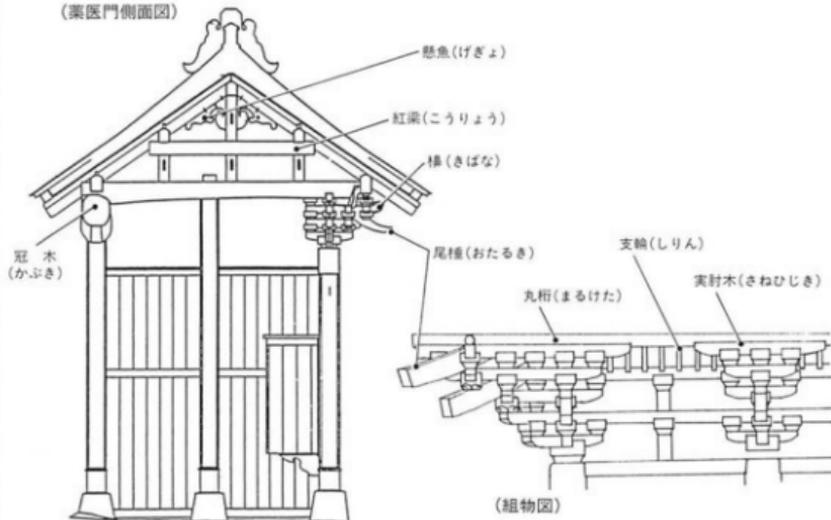
▲山門懸魚

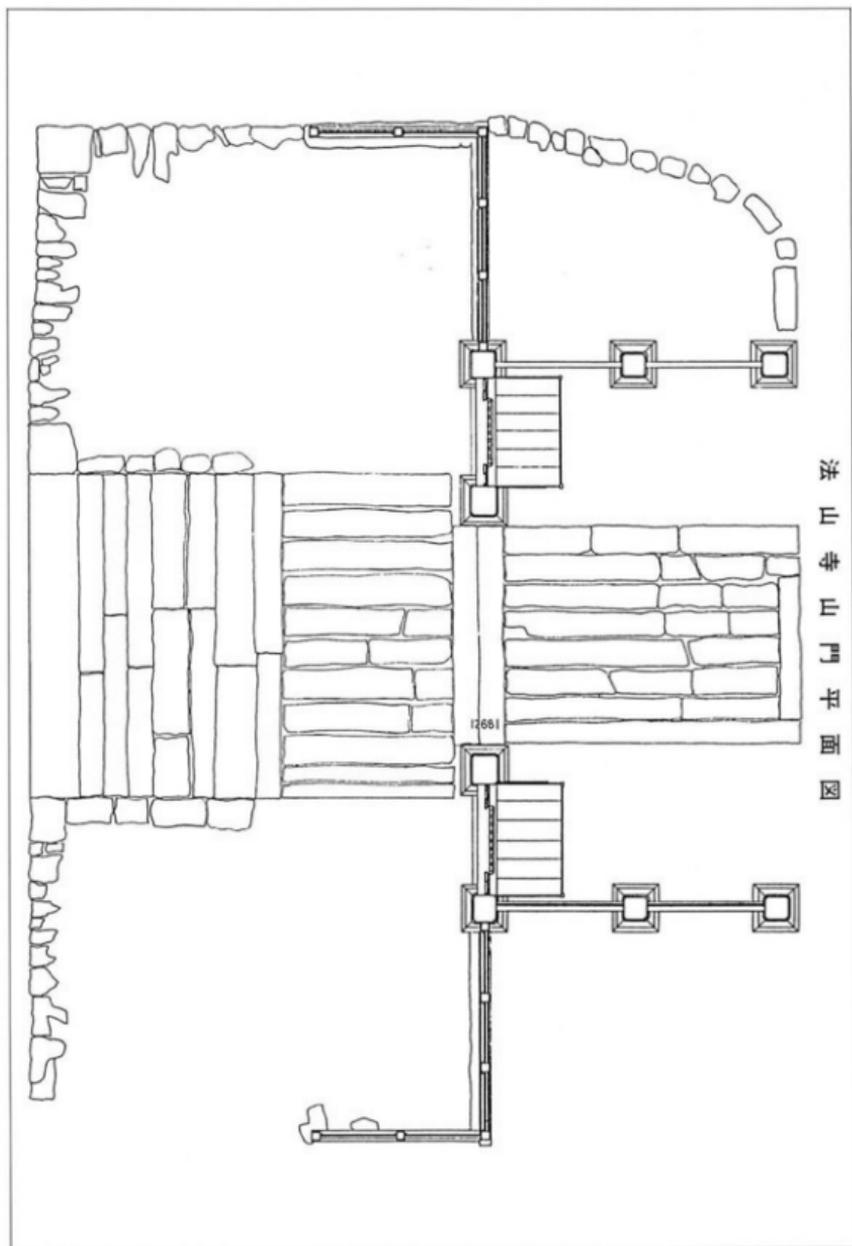


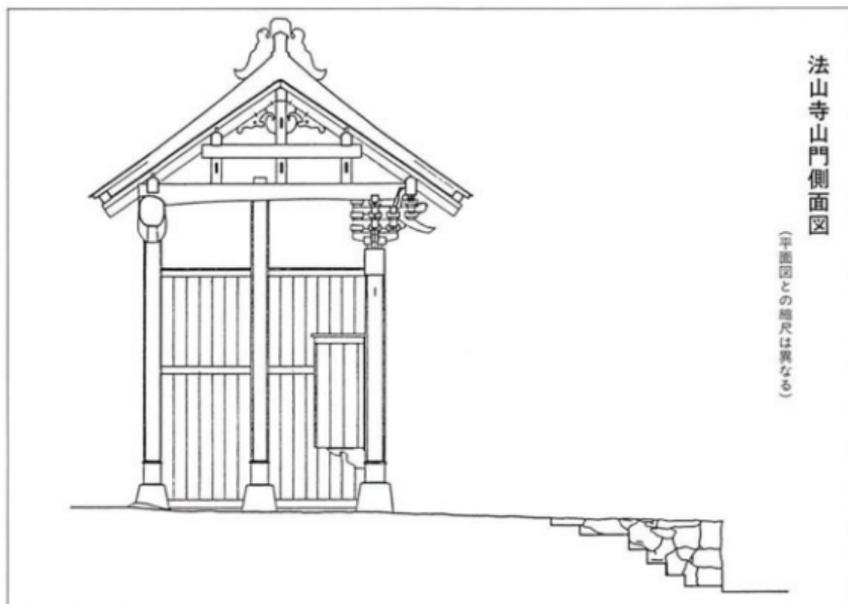
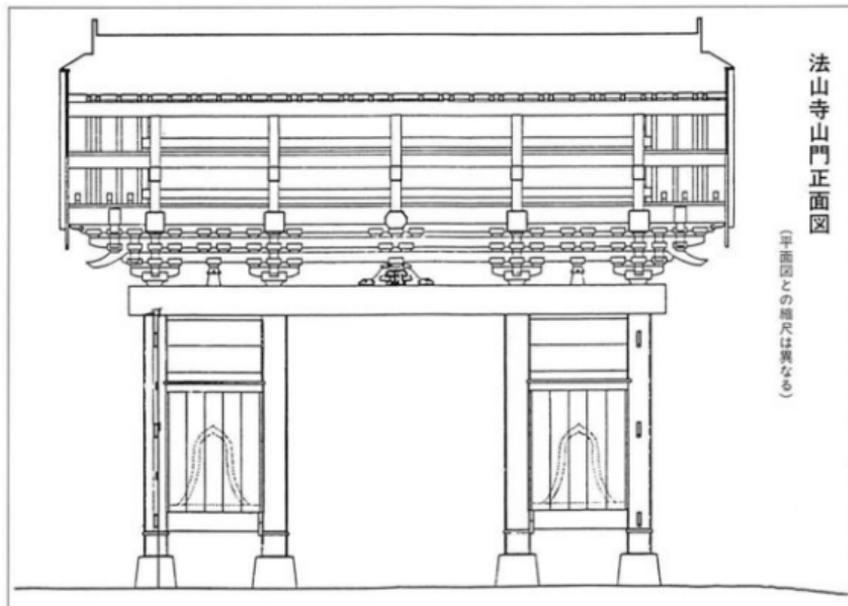
▲山門を西側より見る

### 建築用語解説図

(薬医門側面図)





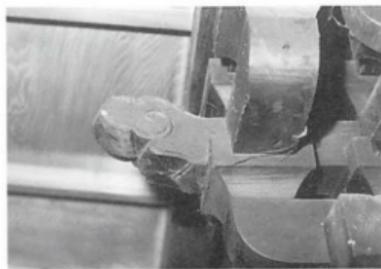




▲法山寺内陣上部の飛天図(左・右)▲

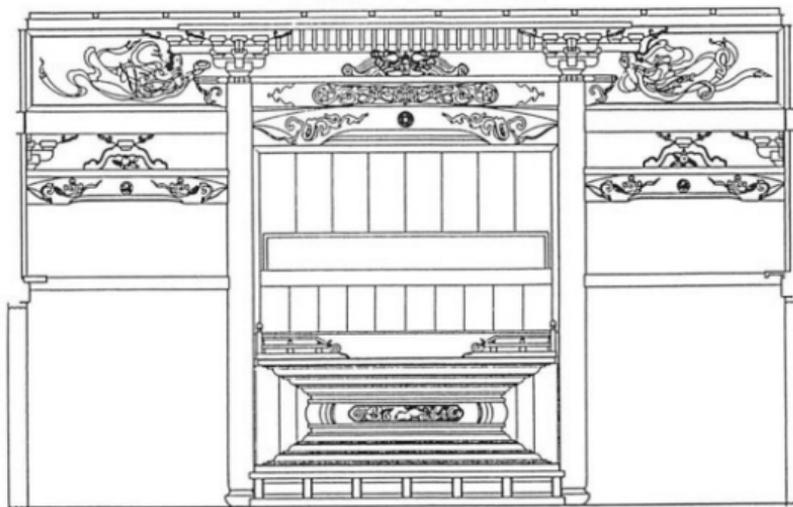


▲内陣臺段と彫刻



▲内陣組物

## 本堂内陣まわり実測図



1:20

## 建築物緊急調査(2)

### 1 調査に至る経過

昭和63年3月、カメイ株式会社石巻支店より、市内門脇町一丁目6番6号にある土蔵二棟を、所在地の有効活用に際し支障となる為、解体したい旨の連絡があった。教育委員会は、この土蔵が江戸時代に南部藩の米蔵として使われていた可能性が強く、近世石巻の様子を知る貴重な文化財であることから保存の方向で協議を重ねた。しかし解体は免れず、止むなく解体時期の延長に協力を頂き、二棟の土蔵の緊急調査を実施した。

### 2 調査実施要項

調査対象 石巻市門脇町一丁目所在  
カメイ所有土蔵二棟  
調査期間 昭和63年4月29日～30日  
調査主体者 石巻市教育委員会  
調査担当者 東北大学教授 坂田 泉  
調査参加者 東北大学文部技官  
田中 正三

### 3 調査の概要

石巻市門脇一丁目、カメイの元ガソリンスタンドの奥に二棟の土蔵が建っており、便宜上「北蔵」「南蔵」とし、そ

れぞれの調査を実施した。

### 4 調査の結果

#### ●南蔵

土蔵造平屋建 切妻造トタン葺  
梁間六・六尺(二十一・八尺)

三・六間

桁行二四・六尺(八十一・二尺)

十三・五間

建築面積 五十坪

二戸前それぞれ下屋庇

竣工 明治四十年六月二十二日

#### ●北蔵近景



室内は、しばしば改造が加えられているが、主として間仕切にそれが見られる。また東妻側に続く小屋組は後世に加えられたトラス(構造骨組の一形式)であり、室内に欄などが新設された。

この蔵の柱の太さは十五・四尺で、柱間は梁間が約九十五寸(三・一四尺)、桁行は約九十寸(約三尺)である。

この小屋組は製材された角材を用い、踵下の母屋によって二ヶ所の小屋組が連結され、室内に中柱はない。そして小屋組の地棟と軒桁に細目の踵を架け野地板を張るが、屋根の葺材の田状は判然としない。この蔵は三室構成の三戸前で、それぞれ室の背面に高窓が設けられている。なお、現在は壁体になっていて東妻側と南側西寄には入口の痕跡がみられ、柱は土台上に建てられている。発見された棟札には明治四十年六月二十日とある。

#### ●北蔵

土蔵造平屋建 切妻造トタン葺  
梁間六・三八尺(二十一・八尺)

三・五間

桁行十五・九八尺(五十二・六尺)

八・八間

建築面積 三十・六坪

二戸前全面下屋庇

造立年代は不明であるが、明治期に改造が加えられたと推定される。現在見られる主な改造は、梁間方面の腰部分の外側に凝灰岩を積み、桁行方向には副柱を加え、部分的には柱間を斜材で補強し腰部分をセメント喰、壁体は全て漆喰塗で仕上げている。同時に床を全面コンクリート吹きとし、梁間外側の柱は床の上に

#### ●北蔵近景



建ち、他の三方の柱脚は切り取ってコンクリート基礎をまわし、十五寸×十二寸の木材の土台を挿入しているなどである。柱の太さは十五・四角で、その柱の間隔は約七十七寸(二・五尺)である。窓換気孔は各戸前上部に、また後補かと考えられる換気孔が二戸前中間上部に設けられている。

小屋組は自然木を使用し、室内には中柱が無い。中間一ヶ所の小屋組は、三本の束で支持される天押梁に地棟をのせ、それと軒桁上に合掌を架ける折置組であって、合掌には母屋はなく野地板を直に横に張っており、西妻側の小屋組は二段に組まれた中央の束により地棟が支持され

ている。室内の小屋組は相互に独立している。野地板により連結されていることになる。また現状では屋根の原素材は不明である。この土蔵は南蔵に比べて木材、軸組、小屋組の全てが古式である。

### 5 考 察

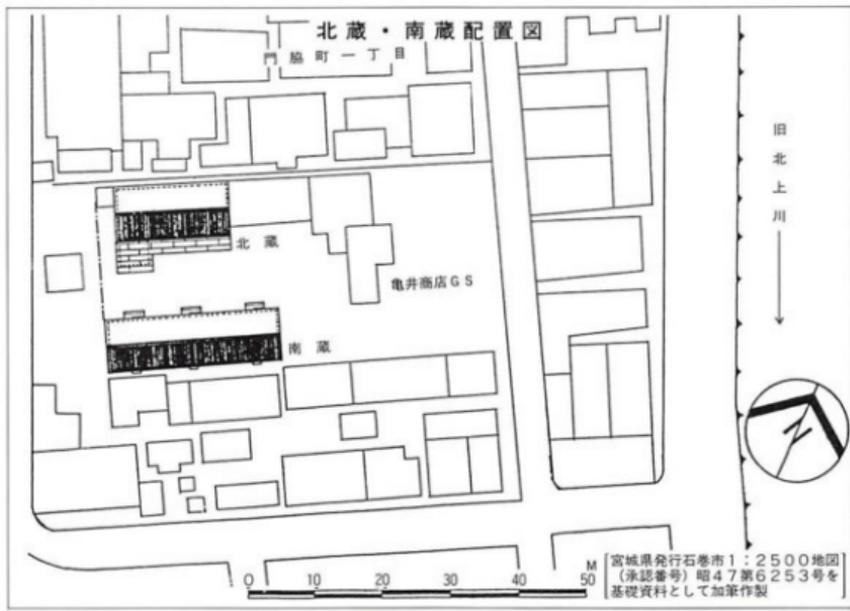
近世の石巻港には仙台藩の米蔵が多数建てられていたが、河口近くを借地して、南部藩のそれも建てた。

『食貨誌』に「慶安二年（一六四九）、江戸米価漸く貴し。九月九日桂七郎右衛門・下田将監に命じて、仙台代官郡山豊後に書を賜りて、始て北上川を運ぶ精米の貯に、仙台石の巻、阿部治右衛門屋敷へ米倉を建てむ事を請ふ。仙台候是れを許す。以て江戸へ運漕す」とある。天和年中（一六八一～一八四）には、梁間四間半、桁行十五間の上・下の古蔵と新蔵の三棟があり、享保八年（一七三三）三月五日の日付のある「南部藩石巻廻米御定目」には、「一、御蔵の間数、一番蔵三間一十間、二番蔵三間一十間、三番蔵三間一十間、四番蔵三間一十間、五番蔵三間一十間、新御蔵四間一十一間、榎葺屋、芽葺とあり、また石巻の南部藩の米蔵の棟札（北上市立博物館蔵）には、寛延元年（一七四八）二十間蔵、寛延二年十四間蔵とあって、米蔵の棟数も増加し、その位置は、古絵図（東北大学中央図書館蔵）によれば中瀬の向いの河口近くから南部会所、一間会所と米蔵が上門ノ脇に示され、弘化年間（一八四四～一八四七）絵図では盛岡御蔵とあって、現在の門脇町一丁目に一致する。これ等の事から、

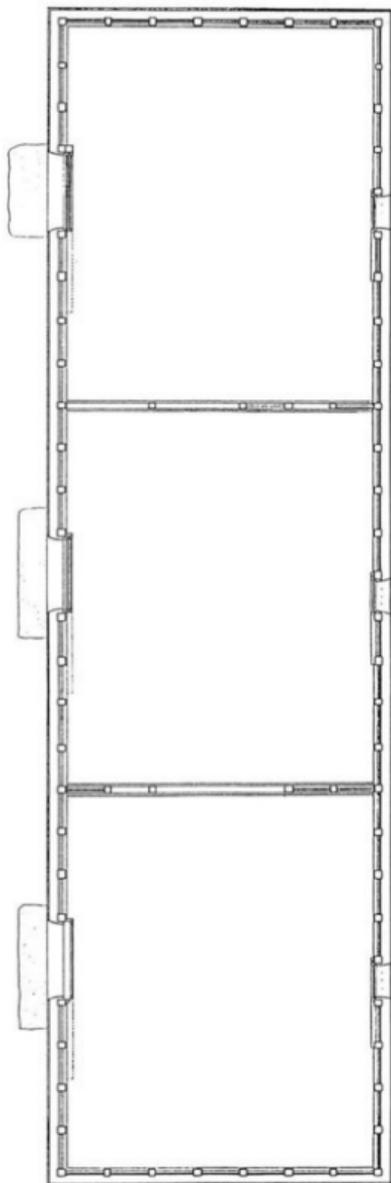
十八世紀の石巻の南部藩米蔵の規模は梁間四間（七趾）前後、桁行十間一十四間（十八趾一二十五趾）榎葺であったことがわかる。

なお、江戸時代の諸藩の米蔵は平屋建瓦葺土蔵、梁間は四間一五間、桁行は二戸前一八戸前で、一戸前が十二一三十六坪とされるので、この度の調査による北蔵は、これを大きく外れないことから古式とみなすことができるので、江戸末期頃の南部藩米蔵の可能性が大きい。

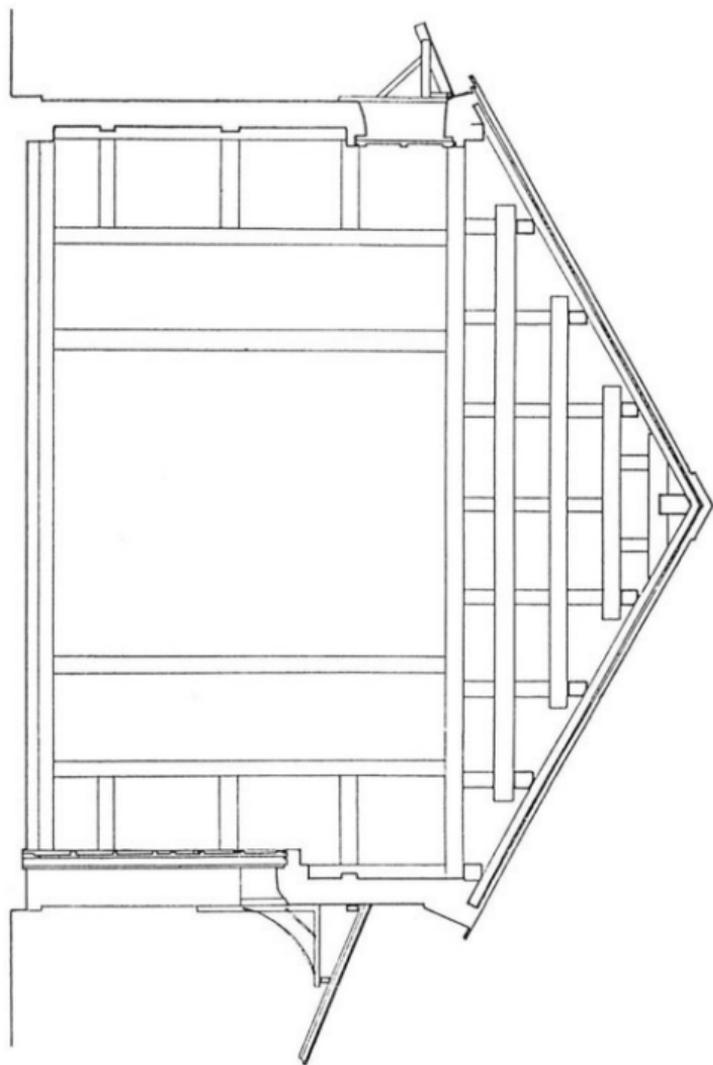
◀北蔵・南蔵全景



南蔵平面図



| 685 |



株  
カ  
メ  
イ  
南  
蔵  
断  
面  
図

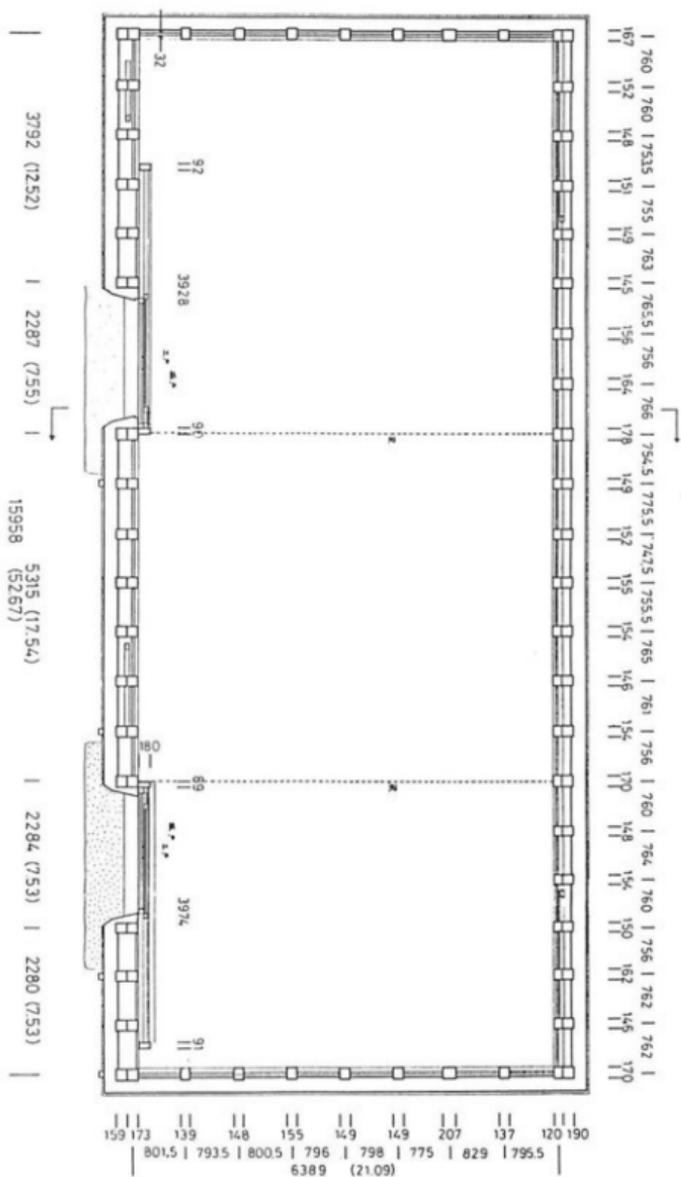
※注…南蔵平面図との縮尺比は異なる

|  
|  
226

2182

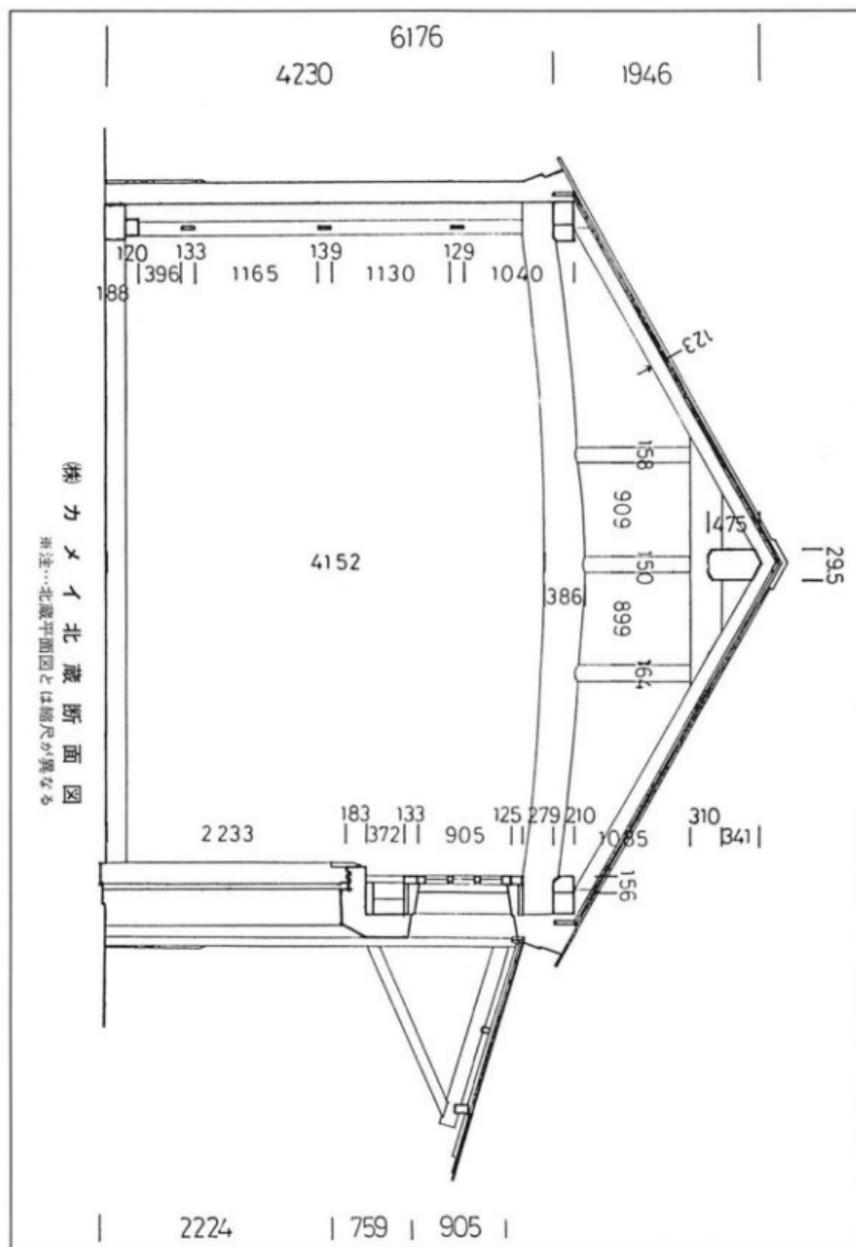
|  
3587

| 836 | 1046 |

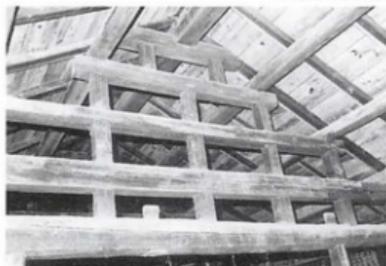


株 カ メ イ 北 蔵 平 面 図

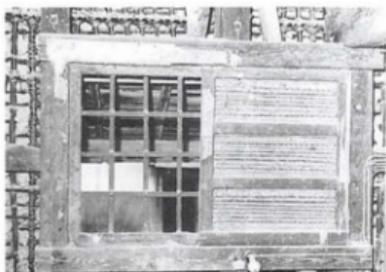
※注…南蔵との縮尺比は異なる



南蔵内部状況



北蔵内部状況



## 昭和62年度 板碑調査

## 上品山寺跡の板碑について

はじめに

石巻市高木と桃生郡河北町の境に位置する上品山は、山頂に社堂十座の一つである久米比奈神社があること知られている。そして、宝来山上品寺があったところでもあり、江戸期から、この上品寺の跡に板碑が造立されていることも知られていた。しかし、近年まで、寺跡は上品山のどのあたりなのか、板碑のくわしい状況はどうであるのか、ということについてはあまり知られていなかった。

この報告は、以上のような疑問に答えるために、寺跡と、板碑の状況を知らせようとするものである。

## 1 上品山の位置と寺跡

上品山は社堂部高木村(現石巻市高木)に属し、標高四六六・八は、北は遠通川(北上川)をへだてて、北上町の翁倉山に対峙し、東は観上山、雄勝峠に、西は麓峯山に連なる。上品山頂には社堂十座の一つである式内社久米比奈社があり、現在でも、高木地区の人々によって祀られている。さらに、「高木村安永風土記」の旧跡の項には、

上品山寺跡 疑陸脚

右八宝来山上品寺と申す有之候處、

何年之頃矣寺ニ罷成道観候哉、年月共ニ相知不申

と、上品寺のことがみえる。上品山頂

の寺院については、この他に坂上田村麻呂の開基と伝える天台宗高徳寺があり、

前九年、後三年の役當時に廃されたとする。この上品山高徳寺については文治元年(一一六〇)一六二、平清盛の末流平資信および一族平重高がこの地にいた、重清の末高平重高は太田道灌に仕えたが戦死。高直の嫡子高徳は仏門に入り、父の菩提を申うため奥州(へ下って上品山にと宗梅溪寺四世大円文管に入門。名を一翁宗猷と改めて梅溪寺五世となり、のちに曹洞宗上品山高徳寺の開山となったとする(宮城県地名・平丸社)。しかし、宝来山寺跡にしろ上品山高徳寺にしろ、これら寺跡は上品山のどの位置に比定すべきかは、明らかにされていない。ただ、高木地区の人々は寺場跡として地名を知るのみであった。今回の板碑調査で、この寺場跡なる場所を推定することができた。それは、上品山頂より南に直線距離で約一〇〇以下の平地であることが確認されたのである(位置図参照)。この地域は現在は雑木がまばらに生えているだけで、寺跡の面影を察知すべき遺構を確認することはできない。わずかに平地であること、板碑数基があることによつて寺場跡と推測されるだけである。

## 2、上品山の板碑

上品山の板碑については江戸期からの記述がある。すなわち、「封内名蹟志」に、

「浄峯権限、高木村ニ有、郡説云、祭神ハ熊野三所権限也、傍ニ古石墳有、高三尺余、文永十年西十月廿七日」と記されている。また観跡開老志には「浄峯寺、在高木村、山上傍有古石墳、一基、文永十年、一基弘安九年」とあり、近代に入ってから史料としての宮城県史、金石編の部、牡鹿郡の項には「文永十年西十月二十七日、の一基のみあり、稲井町史、古碑の部には「文永十曆辛酉十月二十七日、奉造立熊野宮一宇、且殿因秀、大坂也刀生、神三説注行」

## ●弘安九年九月

高三尺、中一尺八寸、外無記号

妙貞、心用、用心三神尼の碑あり

と記すのみで、上品山の板碑についての全容は知るべくもなかった。

今回の調査では、板碑と推測されるものは8基であり、図に示した通りである。しかし、この8基の中には古い文獻にも登場し、比較的新しい宮城県史、稲井町史にも記述されている文永十年の碑は確認することはできなかった。

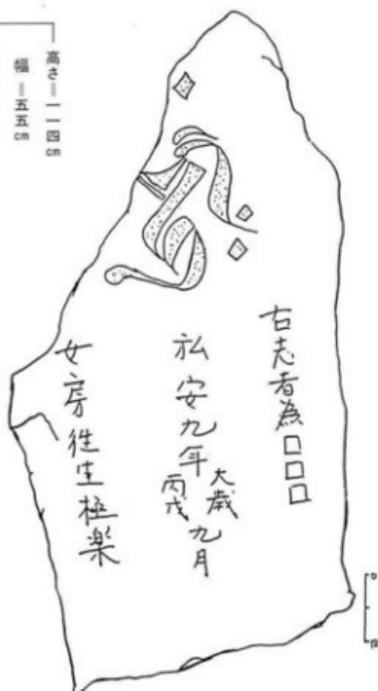
3、まとめ  
上品山の板碑については、一応の確認をすることができたのであるが、次のようなことが今後の課題として指摘することができると思う。

- ①宝来山上品寺と上品山高徳寺とのかわり。両寺はまったく別寺院なのか。あるいは同じ寺院であるのか。
- ②文永十年碑の再確認
- ③現在、板碑の存在しているところが本当に寺場跡なのかどうか。

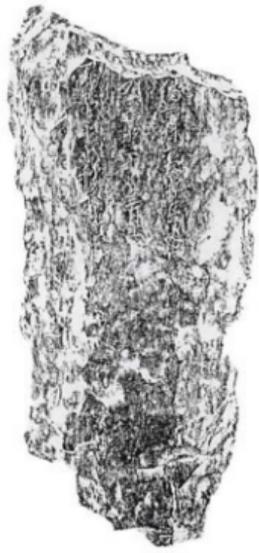
①については文獻の上から確定することは困難かもしれないが、②、③については今後の調査活動によって十分明らかにすることができるのではなからうか。



高さ一四一 cm  
 幅一五五 cm  
 厚さ一五 cm  
 種子一阿弥陀如来  
 年代一鎌倉(一二八六)  
 材質一粘板岩



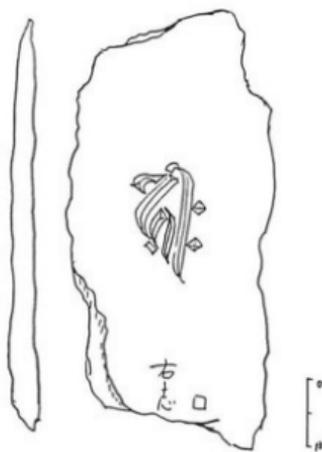
高さ一七七 cm  
 幅一三三 cm  
 厚さ一五 cm  
 種子一不明  
 年代一室町  
 材質一粘板岩



高さ 七三 cm  
 幅 二二三 cm  
 厚さ 一三 cm  
 種子 金剛界大日如来  
 年代 不明  
 材質 粘板岩



高さ 六〇 cm  
 幅 三三二 cm  
 厚さ 三 cm  
 種子 阿弥陀如来  
 年代 不明  
 材質 粘板岩



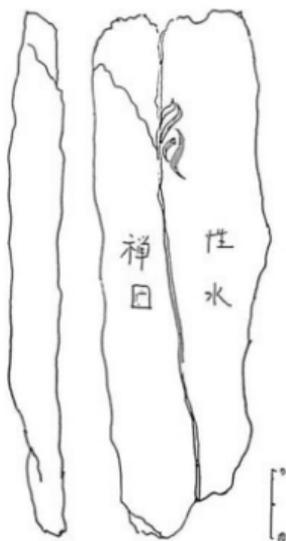
高さ 六二 cm  
 幅 一四 cm  
 厚さ 八 cm  
 種子 地藏菩薩  
 年代 不明  
 材質 粘板岩



高さ 六〇 cm  
 幅 一四 cm  
 厚さ 九 cm  
 種子 金剛界大日如来  
 年代 不明  
 材質 粘板岩



高さ 七六 cm  
幅 二四 cm  
厚さ 八 cm  
種子 地藏菩薩  
年代 不明  
材質 粘板岩



高さ 六四 cm  
幅 二四 cm  
厚さ 八 cm  
種子 不明  
年代 不明  
材質 粘板岩



※賢俊上座の記し方、種子の位置にあたる上部の記号などから、板碑ではないかもしれないが、彫り方が他の板碑に共通するものがあるので、一応板碑としておく。

旧町名表示石柱設置事業

町名も文化財

由緒ある町名を後世に...

「本町」・・・「九軒町」・・・今は失われてしまった昔ながらの町名は、それを聞いただけでその町の形成された様子や、その町の昔の状況を思い起こさせるものが多く、それ自体がわたしたちの「まち」の歴史を物語る文化財です。しかしこのような昔ながらの町名も、昭和37年に「住居表示に関する法律」が制定されたことにより、合理化の名目のもとに次々と姿を消してしまいました。石巻市も例外ではなく、昭和40年から住居表示の変更が行われました。

これまでの町名は、「道」や「通り」に面した一連の家々を一つの「町」としてとらえてきており、向う三軒、両隣りの言葉が示すおりの町でした。ところが、新しい住居表示は「街区方式」といわれる一つの区画（ブロック）を単位とした表示方法です。

しかし、現在の「旧町名」が見直され、各地で従来の町名を残したり、失われた町名を何らかの方法で残そうという動きが活発化し、石巻市教育委員会でも昭和56年度から「旧町名表示石柱設置事業」を実施しております。失われてしまった町名、由緒ある町名など、これまで15ヶ所に設置してきましたが、今年度も新たに2ヶ所に設置しました。

この事業は、地権者の方々のご好意と協力によって実施されています。今後とも皆さぬご協力をお願いします。

〔昭和56年度設置〕

「新田町」 一 千石町（石巻グラウンドホテル前）

〔昭和57年度設置〕

「湊本町」 一 湊町（湊幼稚園前）

〔昭和58年度設置〕

「横町」 一 千石町（河北新報社前）  
「中町」 一 中央二（タックシティ九光石巻店前）

〔昭和59年度設置〕

「九軒町」 一 門脇町二（消防第三分団前）

〔昭和60年度設置〕

「立町」 一 立町一（仙台銀行前）  
「面刺田」 一 清水町一（ニイメマビル前）

〔昭和61年度設置〕

「後町」 一 門脇町一（西光寺前）  
「袋谷地」 一 水明南一（長林寺前）

〔昭和62年度設置〕

「坂下町」 一 中央一（水蔵寺参道入口）  
「本町」 一 中央一（田中央郵便局前）

〔昭和62年度設置〕

「本草園」 一 双葉町（双葉町公園内）  
「御所入」 一 湊字御所入（御所入公園内）

〔昭和63年度設置〕

田町

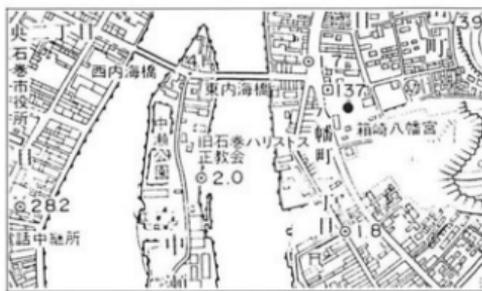
八幡町一（拝智志神社境内）

源頼朝の臣兼町彦三郎胤重は、文治五年（一一八九）の奥州合戦の功によって宮内少輔に補任され、館山に築城したが、第二十二代九左衛門元直の出兵のため兼町氏は断絶。その知行地や除屋敷を仙台藩奉行遠山帯刀良雄が拝領した。現在の「宇田町」は元禄三年（一六九〇）の「遠山帯刀絵図」中の、家臣の貳宅群「下中屋敷四拾軒」の跡地と思われる。同十一年の「社鹿郡萬御改書上」中には「田町長き四町拾四間（約四六二坪）」と記されている。

東町

湊町四（福井嘉明氏宅前）

元禄十一年（一六九八）の「社鹿郡萬御改書上」中に「東町 長さ惣町五拾間（約二〇〇坪）」とある。享保末より宝暦末ごろ（一七三〇～一六〇）の「奥州社鹿藩石巻園」には「御足が町」、文化末より文政末（一八一八～一三〇）ごろの「石巻絵図」には「御足軒」と標記されているが、仙台藩奉行遠山帯刀良雄が断絶した兼町氏の知行地とともに拝領した除屋敷中の、足軽屋敷七拾間が御預御足軽屋敷三拾間のいずれかが、あるいはその双方がここにあったかと思われる。



# あれ?

## こんなとろに文化財が!!

木製の白い標柱に「○○跡」と記され

たものをご覧になった方もいらっしゃる

と思います。文化財は、意外と私達の身

近所にあるものです。気付かずに眠

っている文化財の近くに、石巻市教育委

員会では毎年文化財標柱を設置していま

す。今年も次の五ヶ所(建て替えを含む)

に設置しました。

私達の祖先に残した貴重な文化財を、

次の時代の人々に伝えるため、これら文化

財の保護・保存にご協力下さいますよ

うお願いいたします。

《昭和63年度設置》

### 久米幸太郎敵討の地

新発田藩士久米幸太郎は、父の仇敵滝

沢休右衛門を苦勞の末に探しあて、安政

四年(一八五七)十月九日、ついにここ

祝田浜において討ち果たしました。文化

十四年の事件発生から四十一年目、史上

二番目に長い敵討ちで有名なこの久米幸

太郎敵討事件は、その後菊池寛、長谷川

伸等の小説の素材として取り上げられて

います。

▼設置場所―渡波字祝田浜



▲袖の渡り

### 魔鬼山寺跡

坂上田村麻呂が、この地方を平定した

際に、彼の倒した魔鬼女の供養と、奥州

鎮魂を願い、聖観音像を飼って建てられ

た寺と言い伝えられています。

▼設置場所―湊字船石前山

### 三日防館跡

田んぼにつき出たこの丘の頂上から先

端部にかけてその跡があり、約六〇㊦四

方の平地と、それを取り巻く段築や土塁

が確認できます。

その昔合戦があった時に、ここで三日

間闘い、ついに敵の侵入を防いだところ

と言い伝えられています。

▼設置場所―高木字小沢

### 袖の渡り

源義経が、藤原秀衡をたよって平泉へ



▲京ヶ森館跡

向かう途中にここを通り、船賃の代わり  
に自分の衣の片袖を身えたという伝説が  
あります。古く平安の昔から歌枕の地と  
して知られ、松尾芭蕉もこの地を訪れて  
います。

「みちのくの袖のわたりのなみだ川

こころのうちに流れてぞ住む」  
相 模

▼設置場所―住吉町一(住吉公園内)

### 京ヶ森館跡

標高約二八〇㊦、市内にある館跡とし

ては最も高い所にあります。北と南には

それぞれ大きな空堀が敵の侵入を防ぎ、

特に南側には門跡、通路跡と思われる凹

地も残っています。

その昔、安貞責任が源義家と戦った時

に構えた館であると言い伝えられていま

す。

▼設置場所―沢田字京ヶ森

## 石巻市文化財だより(第18号)

平成元年3月25日 印刷  
平成元年3月30日 発行

発行：石巻市教育委員会  
石巻市日和が丘一丁目1番1号  
電話 (0225) 95-1111 内線345

印刷：株式会社 鈴木印刷所  
石巻市蛇田新谷地前121  
電話 (0225) 22-4101